

文明の海洋史観——日本史像をめぐって——

川勝平太

司会を徳永光俊さんにしていただくのは光栄です。徳永さんの論文「日本農法史試論」が大阪経済大学の『経済史研究』第二号に収録されていますが、これは徳永さんが編集委員の一人である江戸時代の膨大な農書（『日本農書全集』全七十二巻、農文協）から得られた知見をまとめられたもので、循環の思想が披露されています。一五世紀から一六世紀にかけて日本の農業は、麦作から商品作物へ、また麦作へ、あるいは稲作から商品作物、また稲作へと人間が土地をうまく回しながら、自然の理法にかなった生かし方をする循環をつくり出した。これを徳永さんは「作りまわし」と言われ、それを敷衍して人間界における「世まわ

し」、さらに天地の理法としての「天のまわし」という天地循環の思想に発展させられています。私がこれから述べますことは、それに対するつたないコメントにすぎません。そんなことで、間違っているところや、不明なところは司会者の徳永さんにお聞きください。（笑）

今日の話の主題は「文明の海洋史観」、副題は「日本史像をめぐって」です。ただ、日本のことだけを述べるのが本意ではありません。レジュメには「資本主義の海洋的起源」と書かせていただきました。

さて、これまで、歴史について有力な見方がありました。唯物史観（史的唯物論）といわれるもので、資本主義

社会がもつ階級矛盾をなくし、平等が保証された理想の社会主義社会をつくるべきだという世界観です。それは社会主義・共産主義の政治的イデオロギーとなつて、先進国・後進国を問わず人々の心を動かししました。二〇世紀は「社会主義の時代」「革命の世紀」といわれますが、人類社会の未来に理想社会の到来を多くの人々が信じた時代です。

社会主義社会に近づくに、現在は歴史的にどの発展段階にあるのかについて、唯物史観の枠組みのなかで個別実証研究が進みました。しかし、二〇世紀末になつて、社会主義の壮大な実験は無残な失敗に終わりました。平等なはずの社会主義社会に、かえつて権力の不平等が蔓延し、さらにひどい環境破壊がすすんでいることが白日のもとにさらされました。社会主義は理想喚起力をなくしました。社会主義に夢をたくす時代は終わったと思います。

では、社会主義にかわつて、どのような社会を理想として描きうるのか。ここに「地球ガーデンアイランズ (Global Garden Islands)」構想を提起します。それは社会主義・共産主義のような政治的イデオロギーではありません。生活のレベルから活路を開くものです。

人間の自然への関与の仕方には二つあると思います。一

つは、破壊という関与の仕方です。もう一つは、育てるといふ関与の仕方です。狩猟採集段階の人類は、他の動物がそうであるように、環境を変えようというより、自然と一体の生態系の循環の中にあつた。それゆゑ「自然社会」ともいわれます。人間は自然に作為をくわえ、自然のくびきから脱しました。その方法は二つありました。野生植物を栽培植物に変えて農耕社会をつくつた。栽培植物は人為をくわえた人間のための植物です。また、野生動物を家畜化した。オスを去勢し、メスから搾乳する人為をくわえて牧畜社会をつくつた。植物界、動物界に作為をくわえて、人類は自然社会から脱し、文明段階にはいりました。

自然界への作為は、文明段階にはいつた人間の宿命です。人間は自然に手をくわえないでは生きられなくなつたということ。昨今の自然保護運動のなかには、自然にいつさい手をくわえるな、という原理主義がみられます。

それは不可能を主張しているにひとしい。自然界への作為は宿命です。宿命として受け止めたうえで、破壊ばかりではなく、育てるといふ関与の仕方を自覚的に進めるのが、文明人の賢明な道です。自然を生かし、自然によつて生かされる循環システムの構築をめざす。それが文明人の自然

に対する態度でしょう。

人間が作為をくわえた自然は「第二の自然」です。自然に関与なしに人間は生きられません。西洋人は個人の自由を重んじます。日本人は「人に構う」のが特徴です。それが転じて「自然にも構う」生き方が得意です。土地や作物をとことん大切にします。それは破壊とはほど遠い。育てる姿勢です。人間が育てた自然は原生の自然ではなく、「第二の自然」Second natureです。「第二の自然」は「庭」といいかえられます。実際、幕末開港で日本の農業を見た西洋人はそれを「園芸」とみなしました。あの膨大な農書が書かれた時代に、だれが国家目標をたてたわけでもなく、ほとんど無自覚に、島国日本の自然を第二の自然すなわち庭のある島々として育てていたのが日本人でした。今度はいわゆる日本的日本の島々を「ガーデンアイランズ (garden islands)」にするという構想です。

ではなぜ、そこに「地球」を加え、「地球ガーデンアイランズ (global garden islands)」なのか。それは地球の姿が多島海だからです。二〇世紀は「科学技術の世紀」ともいわれますが、その成果の一つは、宇宙にとびだしたスペースシャトルから地球 (globe) をながめられることで

す。それは地球観を一新しました。大きいと思われがちな地球が、宇宙のかなたから見ればケシ粒のように小さい。小さい地球の表面積の七割は海で覆われています。地球は水が循環する「水の惑星」であり、水色の惑星です。五大陸といえども、平均すれば水の惑星の表面積の三割を占めるにすぎません。大陸も、水の惑星に浮かぶ大きな島ではない。地球は多島海であるといえます。

地球は、宇宙から見れば微小の存在ながら、人間にとっては全体性をもっています。人間にとつてかけがえのない水の惑星に浮かぶ大小さまざまな島々に、人々は島の風土に応じた文化（生活様式、ひらたく言えば暮らし）をつくりあげています。それらが交通・通信等のネットワークで結ばれて相互に依存している。海が障壁であった時代は過ぎました。海を媒介にしてグローバルにつながっている。相互依存のなかで巨大な交流がおこっており、それがアイデンティティの自覚を高め、多様性を尊重するという姿勢を生んでいます。それだけに、人々が自己をはぐくんだ歴史と風土に根ざした島づくりをすれば、地球的にみれば、グローバル・ガーデン・アイランズです。

人間と自然との係わりに視点をあてた「地球ガーデンア

「イランズ構想」から、歴史をふりかえり、現状において何ができるかについて考えてみたい。それは実践的課題でもあります。

地球に生きる人類全体の構成単位について、ひと言申し上げたいと思います。かつて帝国という単位がございました。帝国は徐々に地上から姿を消し、二〇世紀に帝国はなくなりました。二一世紀に帝国は復活するでしょうか。いやむしろ、小国分立が時代の趨勢です。構成単位の小さい単位への分化は人類史の趨勢です。帝国のかたわらに、一七世紀にヨーロッパに主権国家という別の単位ができました。主権は当初は国王が独占していました。しかし、フランス革命で国王がギロチンにかけられ、主権はフランス国民の手に移り、一九世紀初めにヨーロッパに国民国家という新しい単位が出てまいります。「国民」という観念はフランスに誕生しました。それは国王の常備軍にかわる、徴兵による国民軍の形成で生まれたともいわれますが、「国民」意識は、ナポレオンが支配を広めたヨーロッパ全土におよび、それらの地域では反フランス意識が目覚め、国民国家としての自立が進みました。

国民は民族を基礎にしています。実際、国際連合は民族

国家からなります。国連への加盟国の数は一九五〇年前後には五〇〇くらいしかなかったのですが、半世紀の間に四倍の二〇〇近くになりました。特にソ連・東欧が崩壊して、諸民族が自決し自立して民族国家をつくり、国際連合に加わって数が急増しました。小国が自立度を高めています。地球上に民族の数は三〇〇〇ほどありますから、論理的には三〇〇〇の小さな民族国家の単位に分かれていくと考えることができます。

民族とは文化を共有する集団のことです。文化とは、日本では芸術、学術、芸能と思われがちですが、それは日本独自の狭義の文化理解です。文化とは、学術的に、生活様式と定義されます。ひらたくいえば衣食住の暮らしです。大阪にある国立民族学博物館では、名のとおり「民族学」が研究されています。民族の研究とは民族の文化と社会の研究であり、文化は生活様式 (way of life) という共通の理解にたっています。要するに、衣食住の暮らしであり、衣には服飾文化、食には食文化、住居には住居文化があります。そういう衣食住の暮らしの立て方、ひと言でいえば、暮らしが文化です。

異なる文化の間に優劣はありません。食文化で、西洋人

のようにナイフとフォークを使うのと、日本人のように箸を使うのとで優劣はなく、違いがあるだけです。言葉もたがいに翻訳可能です。

ここで、文化と文明との区別について述べておきます。

文化については「生活様式」という学術的定義があります。けれども、文明につきましては、統一した定義はありません。文明論者の数だけ定義があります。そこで、私はさしあたって「文明とは憧れられる文化である」と定義しておきます。その理由を述べます。

三〇〇〇の文化はそれぞれ優劣がないにもかかわらず、ある文化は憧れられます。たとえば、古代のローマ文化は、周囲の地域によって憧れられ、ローマ法、キリスト教、ローマ字というローマ文化の三本柱が各地に広まりました。ローマ文化は中心性、求心力を持ち、普及しました。普及した文化は文明と言うことができますでしょう。漢文化であった漢字や律令や儒教ないし儒字の三本柱が憧れられ、取り入れられて周辺に広まった。かくして漢文化は中国文明となりました。

このように文化には、本来、優劣がないにもかかわらず、憧れられる文化は普及していきます。魅力があり、他

の文化圏の人々にとりいれられ、普及していけば、それは普遍性を獲得します。普及した文化は文明ということができるとでしょう。

こうして、暮らしとしての文化理解に立つたうえで、文化・文明の観点から日本を見直してみたいと思うのです。

問いたいのには近代文明の起源です。東アジア史の近代はヨーロッパ勢力が東アジアに及ぶことをもって始まったという見方があります。中国の場合はアヘン戦争後の南京条約によって開港し、日本も幕末の開港を契機にして、日本における近代文明は明治維新から始まったとされています。東南アジア地域は「東アジアの奇跡 (The East Asian Miracle)」(世界銀行)として注目され、東南アジアもようやく近代化がはじまったと言われます。

こうした理解に、わたしは異論をもっています。ヨーロッパにおける近代文明のみならず、日本における近代文明も、その起源は、一六世紀の海洋アジアにあるという理解です。その理由の一つとして、たとえば徳永氏の論文にありますように、一五、六世紀に日本人は味覚革命を経験しました。日本の伝統、たとえば日本の伝統的な食文化は醤油なしには考えられませんが、醤油が普及したのは近世

以降です。それは日本とアジア、正確には「一六世紀の海洋アジア」との接触に起源があります。

「海洋アジア」といきなり言いましても、分かりにくいでしょう。皆様方は「アジア」と言われて、どこを一番強くイメージされますか。おそらく中国・韓国でしょう。日本において「アジア」という言葉を明確な地理概念をもつて使ったのは福沢諭吉ですが、福沢が明治一八年に『脱亜論』を書いたときの「亜(アジア)」とは中国・朝鮮でした。福沢は、日本の近隣アジアにおいてヨーロッパの文明になじまぬ不幸なる国がある。一つの名を中国、もう一つの名を朝鮮という。支那・朝鮮は悪友である。悪友と親しむと、悪名をまぬかれない。日本の進路は脱亜の二字あるのみと主張しました。彼がイメージしたアジアは中国と朝鮮だけでした。

明治後期になりますと、岡倉天心は『東洋の理想』の冒頭に「アジアは一つ」と書きました。彼は続けて、アジアはヒマラヤ山脈で中国文明とインド文明の二つに分かれるが、精神文明において一つであり、人類に偉大なる貢献をしたといっています。すなわち、彼は「天竺」というイメージ世界であったインドをヒマラヤ山脈の向こうにある

地理的概念で明確にとらえました。天心が「ひとつのアジア」と言ったときに、「アジア」としてイメージしたのは中国に加えてインドでした。

戦前期に大川周明が『回教概論』を書き、戦後になって梅棹忠夫氏が『文明の生態史観』を著し、西アジア(中東)を視野に入れていましたが、中東地域が日本人一般のアジア意識にはいるのは、一九七〇年代のオイル・ショック以後のことでしょう。

ところで、中国、韓国、インド、中東、みな大陸アジアです。しかし、今、アジアとして注目されているアジアは、アジアNIEs(新興経済群)であり、東南アジア諸国連合(ASEAN)です。『東アジアの奇跡』という世銀のレポートにおける東アジアというのはNIEsでありASEANです。

NIEs、ASEANとはどういう地域か。海に面しているアジアです。韓国においてしかり、香港しかり、台湾しかり、そして東南アジア諸国においてしかり。「海に生きるアジア」であり、「海洋アジア」です。「海」すなわち東シナ海と南シナ海の両方、シナ海を不可欠の要素としている「海洋アジア」です。海洋アジアというコンセプト

を、これまで歴史家は持たないできました。アジアといえ  
ば常に大陸をイメージしてきました。そこで「大陸アジ  
ア」と区別するべきものとして私は「海洋アジア」という  
新しい地域概念をあえて出したのです。

改めて、海洋アジアという観点から歴史を見直してみ  
ならば、日本が歴史的にもっともかかわったアジアとは  
「海洋アジア」であることに気づかされます。もうすこし  
限定すればシナ海のまわりの華僑・華人のいる地域です。  
それゆえ、「海洋アジア」をもうすこし限定しますと「海  
洋中国」ということができます。

「海洋中国」の起源はかなり古くまでさかのぼれます。  
斯波義信さんの『華僑』（岩波新書）によれば、一〇世紀  
くらいから華中・華南の人たちがシナ海を庭のようにして  
生きていました。北から言えば江蘇省、浙江省、福建省、  
広東省、なかならず福建省が重要です。福建人の生き方が  
「海洋中国」の基礎にあります。彼らは「シナ海は庭な  
り」という意識で漁労、交易活動をしており、すくなくと  
も一〇〇〇年の歴史をもっています。そういう地域に現在  
の華僑が二〇〇〇万人くらいいる。日本が「海洋中国」と  
本格的にかかわったのは後期倭寇の時代であり、まさに一

六世紀です。

それは鎖国前です。鎖国前ですから、内陸志向の鎖国と  
は逆の「開国」の時代です。言いかえれば海洋志向の時代  
であり「海の時代」です。海の時代に、日本人は海洋中国  
人が活躍していた海域に出かけていました。日本人街のつ  
くられた場所を洗っていきますと、それは岩生成一「南洋  
日本町の研究」で明らかにされたのですが、中国人のいる  
ところに日本人がいる。

海洋中国人の活躍した一番南の海域は東南アジアです。  
東南アジアにはもう一つの海洋アジアの勢力がいました。  
インド洋を主舞台にしていた勢力で、海洋のイスラム教徒  
（モスリム）です。「海洋中国」との対比でいえば「海洋  
イスラム」です。「海洋イスラム」とは、「海洋中国」の勃  
興とほぼ同じ八〜九世紀くらいから一二、三世紀にかけて  
モスリムの勢力が東アフリカ、中東、インド、さらに東南  
アジアのインドネシアに及びます。イスラム勢力は環イン  
ド洋にあり、インド洋は「イスラムの海」であった。

こうして、海洋アジアは「海洋イスラム」と「海洋中  
国」の二つにわけられます。それに、両者が出会う東南ア  
ジアの多島海世界をくわえなければなりません。つまり、

「海洋アジア」は「海洋中国」「海洋イスラム」「東南アジア」の三者からなる。東南アジアには世界でもっとも多様な宗教が共存しています。そこには世界最大多数のイスラム勢力とともに、華僑も大勢力をもっている。また、キリスト教徒、仏教徒、ヒンズー教徒もいる。ほかに土着の宗教があり、さまざまな宗教が混在しています。異なる宗教が共存しているという事実は、人々がそこに集まったからです。ヨーロッパのキリスト教徒、チャイニーズ、インディアン、ペルシャ人、ユダヤ人、アルメニア人、日本人など、もっとも多くの民族が集まった時期、それが一六世紀です。

あまたの民族が集まった一六世紀の東南アジアは、まさに近代世界史の出発点です。海洋アジア、なかならずく東南アジアに人々がやって来た。一六世紀後半期に人びとが海洋アジアに蟻集しました。その結果、何がおこったのか。文明の重心が大陸から海洋に移りました。

近代文明の展開したのは、日本にしろイギリスにしろ、島国です。しかし、古代文明はユーラシア大陸の中央部に隆盛しました。大陸の隆々たる山やまから流れでてくる大河の流域につくられました。しかし、近代になりますと、

島国のイギリスが文明をにないます。一方、かつて大陸文明がさかえた地域は低開発世界にすぎんでいきます。求心力・普及力をもつ地域が海洋に移りました。

その転期となったのは何か。一三世紀に世界最大の大陸帝国になったモンゴルがユーラシアを席卷したことです。モンゴルの世界支配は彼らが世界の最大の陸地を支配しただけでなくて、交通・交易のルートを設けたので、人が移動し文物が流通しました。

その流通のうちで注目したい流通は病気の流行、正確には「病原菌の流通」による疫病です。後にヨーロッパにおいて黒死病をもたらす腺ペストもそのひとつです。ヨーロッパの人口の三分の一の生命をうばい、中東でも三分の一の人口をうばった。一三四七年にヴェネチアにはじまり、ジェノバ、フロレンス、マルセイユからイベリア半島、ピレネー山脈、アルプスをこえて三年ほどでスカンジナビア半島にまでおよんでいます。これはヴェネチアという東方に一番近いところからはじまっていることに示されますように、あまり注目されていませんが、中東地域も腺ペストにおそわれていました。その東にある東アジアでも事情は変わらなかったとみられます。元帝国の人口は一億

二〇〇〇万とされていますが、つづく明代は人口が六〇〇〇万と半減しているのです。

一四世紀中葉に人類、すくなくともユーラシア大陸の人類は、シルクロードを伝わった病原菌によって一大危機にみまわれた。危機に対する療法としては薬草（ハーブ）しかありませんでした。薬草を調べていくと、これがおどろくべきことに、東南アジアに産する胡椒・香辛料でした。医食同源といいますが、病気をふせいだり、直したりするのに、その薬材として、胡椒・香辛料に薬効があると信じられていたのです。人びとは薬をもとめて胡椒・香辛料を産する東南アジアに集まってきました。

一六世紀後半期に東南アジアに胡椒、香辛料をもとめて人びとが集まったとき、それぞれの地域の人びとは出身地の文化（生活様式・暮らし）を構成している物をもってきました。中国人はお茶や茶碗、衣料の絹をもってくる。インド人は木綿をもってくる。こうしてさまざまな人たちがそれぞれの生活用品を交換する。海洋アジアにおいて、旧文明を構成していた文明の諸物産が交換されたのです。一六世紀後半期の東南アジアは世界最大の交易センターであった。ここに世界経済の原型があります。それを「プロト世

界経済」とよぶこともできるでしょう。そこに日本人もヨーロッパ人も加わったのです。

プロト世界経済の「一六世紀の海洋アジア」へのかかわりの後に、西ヨーロッパでは近代世界システムという資本主義社会が勃興してきました。日本は「鎖国」になりました。その動きは対照的です。しかし、いずれも海洋アジアとのかかわりの中から出てきたものです。海洋イスラムもヨーロッパも海洋中国も、薬と目された胡椒、香辛料を用います。それを用いない唯一の食事文化をつくりあげたのが日本です。世界の食料のうち胡椒、香辛料を必要としないうのは日本の伝統的食文化だけではないでしょうか。ちなみに、醤油の発明は、海洋アジアとの交流なしでやっていくことのできる条件の一つになりました。それが鎖国の一つの原因であると思います。醤油の発明で日本は鎖国したというのは話を単純にしすぎた感がありますが、輸入品のかわりに国産品を用いるという意味で、鎖国とは何かを考えるうえで重要です。

当時、日本人もヨーロッパ人も東南アジア地域にきて、物産を交換しました。その交換の構造が似ていました。日本は戦国時代に鉱山史上の最大の発見がおこり、日本の

金、銀、銅が海洋中国を通じて中国や東南アジア地域に運びこまれました。その大半は中国大陸に運ばれたのです。

ヨーロッパはヨーロッパで、ラテンアメリカで発見したポリビア、ポトシの銀、ペルーの銀、メキシコの銀、ブラジルの金をもちかえり、その三分の一の量をポルトガル人、イギリス人、オランダ人たちが喜望峰をまわり、インド洋から海洋アジアに運んでいました。また、太平洋をこえて、銀が海洋アジアに入りこむルートもありました。アカプルコというメキシコの太平洋に面した港からフィリピンのマニラに向けて銀がガレオン船で運ばれていました。フィリップ二世の名を冠したフィリピンにマニラという町ができたのは一五七一年のことです。マニラでは、銀と交換に、中国人から生糸を買っていました。ガレオン貿易です。銀は日本と西洋から海洋アジアに流れこみました。それは東南アジアにすぎませんで、中国とインドにすぎません。その見返りに、アラビア人、インド人、中国人の物産を、日本人とヨーロッパ人がもちかえる交換の構造ができあがったのです。日本とヨーロッパからは一方的に銀、銅、金が海洋アジアに流出する。中国には銀と銅、インドには銀が運びこまれたのです。銀をヨーロッパ人がインド

に、日本人が銀と銅を中国に運ぶ構造が一八〇〇年くらいまでつづきます。膨大な金銀銅が海洋アジアに運ばれ、交易されてインドの美しい織物、中国の美しい陶磁器、アラビアのコーヒ、中国の茶など憧れられた物産が継続的に買われた。そういう関係が一六世紀から三世紀にわたってつづきました。BC五〇〇年くらいに成立した大陸の諸文明でつくりあげられた生活様式を構成している物産に憧れたヨーロッパ人と日本人が、はじめてそれらと大々的に接したのが一六世紀であり、海洋アジアを舞台にアジア物産を買いつづける期間は三〇〇年くらいの長さになります。いや、もつと長いとさえいえます。

日本の場合、一三五〇年ころから本格化する倭寇の時代にさかのぼることもできましょう。ヨーロッパの場合、ヴェネチアが勃興してくる一二世紀くらいから東方物産を購入しています。その頃からアジアへの憧れがあった。一八〇〇年くらいまで、ほぼ五〇〇年くらいの東方への憧れの期間を想定できるわけです。それは具体的にはモノの流れで論証できます。

日本では唐物趣味として現れ、ヨーロッパでは一七世紀後半には木綿を中心としたインディアン・クレイズ（イン

ド狂い)、一八世紀には陶磁器を中心としたシノワズリ(中国趣味)といわれる東洋趣味の大流行があつて東洋からの舶来品への需要が高まり、一八〇〇年くらいまでは海洋アジアとの貿易において貿易赤字を背負ひこみました。

日本・ヨーロッパとは海洋アジアとの関係において、どちらがどちらに憧れていたのか。いうまでもなく海洋アジアに引きつける魅力があつたのです。アジアから舶来する品々に憧れがもたれた。近代の起源は海洋アジアです。

ただし、「海洋アジア」とはいつても、日本の場合には「海洋中国」、ヨーロッパの場合には「海洋イスラム」の影響を受けたという区別ができるでしょう。

海洋アジアは一体何をもたらしたのか。新しい暮らしの立て方です。暮らしが変わつたのです。暮らしとは、先のべましたように、文化のことです。暮らし、すなわち文化が変わつたのです。日本でも使う物が、中世の麻から近世の木綿へ、中世の木椀から近世の陶磁器へというように、ガラッと変わりました。社会で使われる物の総体を「物産複合(product complex)」と呼びますと、海洋アジアとの接触によって、新しい物産がもたらされ、それが日本とヨーロッパの社会の物産複合の変容をもたらしまし

た。使う物が変われば暮らしが変わります。物産複合の転換が文化の変化をもたらします。

ところで、これまでの社会変動の理論は大きく分けて二つあります。一つは唯物史観で、階級闘争によって社会が変わっていくという見方です。労働者が連帯をして資本家をやっつける階級闘争です。もう一つは梅棹忠夫さんの生態史観です。乾燥地帯における遊牧民の暴力が中国、インド、地中海、ロシアに及んで新しい帝国ができ、また遊牧民が興つて旧帝国を滅ぼして新帝国を生むという。暴力で社会が変わるといふ見方です。

私は、これまでの話からおわかりのように、ヨーロッパと日本の場合、海上の道を伝わる舶来文化の影響で社会変化がもたらされたという見方をとつていきます。人類は海に浮かぶ陸地Ⅱ島に生きています。島は海の波によって洗われます。柳田国男の『海上の道』を思い起こしてください。柳田の最晩年の名著『海上の道』は、日本社会が縄文文化から弥生文化に変わったのを、渥美半島に流れ着いたヤシの実からヒントを得て、平野人の米の文化が南洋から海上の道を伝わつてやつてきた。それが日本の歴史を山人の縄文文化を弥生文化に変えたという、大きな社会変化を

説明するために出された仮説です。「海上の道」仮説は、縄文から弥生の社会変化にとどまらず、もっと広いインプリケーションがあります。

日本社会は幕末開港を契機とした明治維新のときも、近世初期もそうですが、海上の道を伝わって舶来する文物に洗われて、社会が変わる。新しく舶来した文物が従来の文物と競合し、その競合過程で、旧来使っていた文物がだんだんと特定の位置におしやられていく。たとえば、絹は「綿（わた）」と言われていましたが、そこに木綿が新しく舶来すると、絹は「真綿」と言われるようになり、綿（わた）といえば木綿を指すように名前を変えながら、絹も木綿もそれぞれ奢侈品・大衆品の位置をしめて衣料文化を豊かなものになりました。海上から舶来する文物によって社会が変わり、暮らしが変わってきた。

物産複合が、西ヨーロッパと日本において、ほぼ同時期に、アジアの諸物産を生活にとりこむ中で、本質的に従来のもものと変わったのです。それがまさに中世から近世への社会変化だといえます。ヨーロッパの中世社会と近世社会では使われている物が違います。封建社会から近代社会へという階級が変わったというより、人々の暮らしを立てて

いる物のなかみ、衣食住をささえる物産が根本的に変わつた。それを一つ一つ追いかけていくと、暮らしの必需品になつたのが海のかなたからの舶来品であつたことがわかります。しかもそれはヨーロッパの勃興と軌を一にして起るアジア地域の衰退と深く関連している。そのような世界的連関は海上の道を見ることによって判明するのです。

海のかなたのイメージとしては恐れもあるでしょう。しかし、ニライカナイというように、海のかなたに神様の住む往生楽土がある。そこから神がやってくる。光り輝く太陽が立ちのぼり、荘厳に夕日が沈む波間をみつめていくうちに、神々しいなものかが海のかなたからやつてくるという期待にかわり、人間が一日一日の地球が自転する循環の中の感性がみがかれ、感動、祈り、憧れがニライカナイのような思想になつていったのではないのでしょうか。

海のかなたのものを受け入れる気持ちは、島国においては強い。そういう島の生活に、海外から便利なもの、きれいなもの、効率のいいものが入ってきますと、人々はやみつきになつてほしがり、それらがやがて必需品になつていく。それが一六世紀からヨーロッパと日本で同時期に起こつたのです。すこしかたい表現でもうしあげれば、生活

をかたちづくる社会の物産複合に、新しい物が加わり、物の新しい結合がおこると、生活様式は変化する。物産複合は衣食住の生活の物的基礎をなすものであり、これを下部構造として、その上に文化がそびえています。物産複合が変化すると、それにつれて上部構造である文化は変容するということです。

ブローデルに『フィリペ二世時代の地中海と地中海世界』（邦訳『地中海』藤原書店）という本があります。一六世紀をさかいに、ヨーロッパ人の活躍する主舞台が地中海から大西洋の世界に変わりました。その前夜の二一七一年にレパントの海戦でキリスト教勢力がイスラム勢力のオスマントルコの艦隊を撃破しました。それでキリスト教勢力は後顧の憂いがなくなり、大西洋の世界に乗りだした。地中海から大西洋へという潮流の変わり目を『地中海』に書いたあと、ブローデルは一步進めて『物質文明・経済・資本主義』（みすず書房）という書物を著しました。人間の物質生活をつくり上げている物を見ると、食料・飲料にしても、一六世紀から一八世紀にかけて劇的に変わりました。糖、木綿の使用のほか、一五〇〇〜一八〇〇年にヨーロッパ

パ人の暮らしが一変したことを晩年の三巻本で明らかにしたのです。ヨーロッパ人は西は大西洋、東はインド洋に乗り出すことによって、新しい舶来品に洗われ、生活用品が変わります。

舶来品に対しては対価がいります。舶来品を買える貨幣が無限にあれば苦勞しませんが、支払いには限度があります。それをどう解消したのか。結論からいえば、「海洋アジア」のインパクトに対するレスポンス（対応）として産業革命がおこりました。舶来品を買わなくてもすむように、みずから作るという方法の開発です。こうして物づくりを目的にする社会が誕生した。自生的に近代工業社会が生まれてきたわけではありません。毛織物が木綿に化けるわけではないのです。産業革命で何をつくったのか、何を発明したのかを見ていけば、おのずからわかることです。木綿は舶来品です。紡績機械・織物機は最終的には人間の日常生活で着るものをつくるための手段です。砂糖、木綿、コーヒー、茶碗なども同様です。そういうものがなぜプランテーションや機械でつくられねばならなかったのか。それは海洋アジアからのインパクトが深甚な影響を生活に与えていたことに気づかされるでしょう。

最初の産業革命をおこしたイギリスでは、木綿はインドから舶来したものを自分たちでつくった。鉄道もリバプールとマンチェスターの間に最初に敷かれます。リバプールは貿易港です。西アフリカから奴隷を運び、それをアメリカ南部に運ぶ拠点港です。アメリカ南部からは綿花が運ばれてくる。その綿花をリバプール港から内陸のマンチェスターに運ぶ鉄道として最初の鉄道は建設されました。

ただ、イギリスは好奇心が旺盛で、あのときに一〇〇万人くらいがステイブソンがつくったロケット号を見物にいき、一人ひかれて死にます、気の毒なことでしたが、残りの人は楽しんで、自分も乗りたい、乗ること自体がおもしろいということになり、鉄道ブームがイギリス中に起ります。いわゆる鉄道狂時代です。地域によって線路と線路の間のゲージ（軌幅）がちがったりするのですが、イギリスの鉄道をつくったのは全部民間でした。その派生効果で、トーマス・クックのように禁酒運動をしている牧師が鉄道旅行のエクスカージョンをやると皆が喜ぶことを発見し、それが成功すると、鉄道旅行会社を起し、やがて世界的な旅行会社になっていったりしました。ともあれ、世界最初の近代的鉄道建設の動機は綿花、綿布を運ぶため

でした。そこに示されているように、イギリスの生産革命はアジアのインパクトに対するレスポンスでした。

一方、日本の場合には、小さな島国の中で舶来品を全部国内で自給したのです。

人類史において、それまで交換や商業が中心の社会から初めて生産それ自体を目的にする生産志向型の社会が大体一八〇〇年くらいに出現してきますが、イギリスの場合に産業革命といわれるのに対して、日本の場合には余り着目されません。日本は土地が狭い。土地の稀少性を大事にして、労働を多投して土地の生産性を世界一にしました。労働集約型の生産革命で「勤勉革命」ということができます。勤勉革命は速水融氏の命名です。

産業革命 (industrial revolution) と勤勉革命 (industrious revolution) はともに物づくり革命であり、生産革命です。日本と西ヨーロッパとが受けた海洋アジアのインパクトは大きく、生産革命はそれに対するレスポンスです。生産革命の結果、アジアから経済的に自立できました。脱亜したのです。脱亜とはいっても、ヨーロッパの場合には環インド洋の海洋イスラム、日本の場合には環シナ海の海洋中国に関わりが深かったので、ヨーロッパの場合には「脱イ

スラム的アジア」、日本の場合には「脱中国的アジア」としての脱亜になりました。

ヨーロッパにおいてアジアないしオリエントとしてまっ先にイメージされるのは決して日本や中国ではなく、中東であり、せいぜいインドまでであったことも説明がつきまです。また、日本がイメージする場合はせいぜいインドまで、基本的には中国がイメージされます。その例証として、サイードの書いた『オリエンタリズム』（平凡社）があります。これは一九世紀初めあたりからヨーロッパ人もったオリエントのイメージを書いています。オリエントについてのヨーロッパで書かれた文献がたまっていくのですが、オリエントはヨーロッパを際立たせる逆イメージとして描かれていきました。ヨーロッパが陽とすればオリエントは陰として描かれる。そのイメージがオリエンタリズムです。そのオリエンタリズムから逃れることがオリエントの課題であるということです。サイードはレバノン人で、その苦悩を書いている。サイードは「オリエント」を別の言葉で何度も「アラブ・イスラム世界」と言いかえています。中東にいる人間にとつて、ヨーロッパのオリエントがアラブ・イスラム世界として前提的にイメージされている

ということですが。

一方、日本では、福沢諭吉が脱亜論を書いたとき、「亜」として書かれたのは中国と朝鮮であり、岡倉天心が『東洋の理想』を書いたときの東洋は中国とインドです。日本人はアジアと言った場合に、まず中国を思い浮かべます。それはヨーロッパと日本が、それぞれアジアのどこから大きな影響を受けたかを示しています。日本は脱中国的アジア、ヨーロッパは脱イスラム的アジアで「脱亜」した。脱亜文明として、二つの経済社会がユーラシア大陸の両端に誕生しました。

ここから二つの論点を出せます。一つは、経済発展ないし生産志向型の社会形成の道は一つではなく、少なくともヨーロッパ型と日本型の二つの道がありました。ゆえに、経済発展にはヨーロッパ方式しかないというのは誤りです。二つあった以上、多様な道がありうるということですが。もう一つの論点は、ヨーロッパの経済発展が文化的に憧れたアジアの物産を自分たちの生活に取り入れるための経済革命であったということですが。経済発展自体はヨーロッパ文化をつくり上げる手段であった。それは日本の場合も同様です。日本人が憧れた中国の磁器や朝鮮の高麗茶

碗・井戸茶碗を、やがて日本人が自分の手でつくつて樂しむ形にして茶の湯の文化ができあがりました。これも日本の中で全部を賄いつつ、日本文化をつくりあげる手段でした。経済発展自体が目的ではなかった。土地の生産性を上げることを目的にしたものではなかったのです。それゆえ、経済の発展は文化の発展に従属するものである。もつと一般的に言えば、経済は文化のしもべでしかない、という論点をひき出すことができます。

海洋に浮かぶ島国の日本とイギリスに、新しい経済社会が海洋アジアの圧力を跳ね返す中で二つの経済社会ができた。その典型の一つが大英帝国であり、もう一つが島国日本です。

脱アジアの形の違いに注意するべきです。イギリスの場合にはエンパイア型です。広大な土地が新大陸にある。フロンティアです。それを開拓していく。それは今の言葉で言うところと自然破壊です。フロンティアが無限にあるかのごとくにみえるために、フロンティア開拓が善とされました。フロンティアが無限にあると思つた人間は土地や資源を浪費する。フロンティアはだれの所有でもありませんので、手に入れば、人間は、そこをきつちりと自分の所有地とし

て守るために軍事力を行使する。軍事力でフロンティアの資源を自分たちのものにする。すなわち、富国になるためには強兵を伴わざるを得ない。富国強兵は必然のものになつてくる。

ヨーロッパの発展は宗教・商業・戦争が三位一体になっていました。キリスト教の布教と商業活動と武力が区別されていなかった。ガリオン船とかカラック船は武装商船です。イギリスやオランダの海洋博物館や船舶博物館に行きますと、大砲を何本も備えた商船を見ることができます。

日本の場合は、意図したわけではありませんが、三〇〇諸侯に分かれ、藩同士が侵略しない。相手の土地を奪はず、徳川幕府も援助しない。自力で経世済民しなくては行けないので、たとえば鍋島藩ですと有田焼、畿内では木綿、新潟では米など、それぞれ特産物をつくり、大阪で交換する。相手の土地を奪えないということはフロンティアがないということです。フロンティアがないところで、各地が比較優位を風土に根ざしたところからつくりだしていく。資源は無駄にできません。ヨーロッパ人が新大陸でやつた資源浪費型、資源消費型に対して、対照的なりサイクル型、徳永さんの言葉を借りれば「まわし型」の形がで

きあがったわけです。

実や花のなる植物が喜ばれ、園芸が盛んになり、園芸国家、ないし「庭園国家」の景観を呈することになりました。開国後にヨーロッパの人たちが日本の姿を見たときに、この国の姿をガーデンと形容した。つまり、日本はヨーロッパ人の目に美しい国として映ったのです。

一方、日本人にとってヨーロッパは強い国と映った。

ヨーロッパは軍事力を、日本は文化力を、という異なる影響を与え合ったのです。モネやルノアールに代表されるいわゆる印象派、後のジャポニズムといわれる文化潮流における日本の影響は美の影響です。「庭」もその一つです。ヨーロッパの後のガーデンシティというコンセプトの原型になりますし、さらに印象派の代表であるクロード・モネのジヴェルニーの庭づくりに集約されていく。

フランス人が最も誇る画家の一人クロード・モネのジヴェルニーの庭を、彼は版画を見、浮世絵の花鳥風月を見ながら日本の庭をイメージしてつくった。日本の庭には池があるので、わざわざ水を引いてきて池をつくり、日本の池にはハスが咲いているからロータスを植える。そして池に太鼓橋がかかっているので、太鼓橋をつくる。太鼓橋に

藤がかかっているからということと藤を垂らす。美しい日本イメージがそこに働いています。彼は庭を絵に描き、それを売ってお金を得て、また庭をつくる。絵はだれのものであってもよい。しかし、庭は公共のものであるからということで、彼は死ぬときに庭を国家に寄附しました。美の文明として日本が影響を与えたのは、日本の物づくりの歴史の経緯から来るわけです。

国を経営する形も違っていました。西洋の場合は富国強兵ですが、近世日本の場合、土地所有が武士にとってほとんど意味がありません。土地は鎌倉武士にとっては所領として一所懸命の対象でしたが、江戸の武士は土地を新たに獲得できない。あるほどの土地を活用することしかありません。いわゆる経世済民で、土地の生産性を上げるために勉強する。宮崎安貞『農業全書』に典型的に示されるようになります。言ってみれば、これは経営です。所有よりも経営という発想になるわけです。

すこし理論的なことを言いますと、従来の資本主義の形成の理論は「本源的蓄積」ないし「原始的蓄積」の理論で、これはマルクスが『資本論』第一巻の末尾で論じたも

のです。『資本論』は資本主義社会イギリスを分析したもので、理論だけが書かれているわけではありません。『資本論』の最初の数章は理論的ですが、第七章くらいからはイギリスの工場視察官報告であるとか、『英国議会資料』を利用して、イギリスの経済社会を具体的に分析しています。

イギリス社会には資本家と労働者がいる。これが資本主義社会である。こういうイギリスの資本主義社会にドイツもフランスもなるという信念を彼はもっていた。先進国は後進国の未来像であるという信念です。先進国イギリスにおいて資本家と労働者が明確に分かれている。資本主義社会になるためには、二大階級が成立しなくてはいけない。その過程は資本主義的蓄積とは異なり、それに先立つものです。それには農民から土地を奪うという暴力的な歴史があった。彼は「血の立法」によって「羊が人間を食う」事態を例示しながら、農民が生産手段を奪われ、土地から切り離されていく過程を描いた。これは余りにもむごいマルクスは見た。「原始的蓄積」と日本では訳されているほど非人間的なものであった。資本家と生産者ないし労働者が分かれていく過程です。

そういう二極分解がイギリスで一六世紀くらいから一八世紀にかけて起こった。けれども、二〇世紀末という現代的観点から見ますと、土地を持っている有産者と、土地を持っていない無産者がいれば、資本主義的経済発展が起こるかというところはない。アフリカ、インド、ロシア、エジプトなどどこでも、土地持ちがお金を持っている人と、無産者がいる地域があります。けれども、資本主義は起こらない。

生産手段と資金を持ち、他方でそれらを持たない労働者がいれば、資本主義社会が起こるという理解には、何かが抜けている。何が欠落していたのか。

イギリスを追いかけたドイツ、アメリカ、なかんずくドイツの場合、一七世紀の三十年戦争以降、国がまとまらなくて、ようやく国がまとまったのが明治維新を過ぎて三年後。フランスに戦争を仕掛けて賠償金を取ってイギリスを目標に追いかけた。そのときに、株式会社制度とか大銀行を創設して、社会から資金を集める。その活用を人に任せ。だれに任せるか。経営者です。有能な銀行家や経営者に任せて、大工業を経営した。ここで所有と経営の分離が起こったのです。

ただし、そのことの重要性は理論としてすぐには気づかれなかつた。一八世紀のアダム・スミス、一九世紀のマルクスも、ヨーロッパの経済学者は「資本家」は頭から経営者だとイメージされていたのです。

所有と経営の分離に初めて気づかれたのが一九一二年です。オーストリアの経済学者シュンペーターが二七、八歳のとき、マルクスの考えたことを自分で考え直す。また、資本主義の形成にプロテスタンティズムの宗教的影響があつたと論じたウェーバーの理論も考えにいれ、資金を持つてゐる資本家と経営をする企業家とは別者である。企業が経営を行うことと、資本家が資金を持つてゐるといふことは機能が別で、所有と経営は本来違ふ。大事なものは経営能力であり、資金を活用する能力である。経営能力が経済発展の根本である。彼は著『経済発展の理論』において「経済発展の根本現象」は企業者活動だと論じました。シュンペーターが企業家を資本家と明瞭に区別して初めて所有と経営とは違ふということがわかつたのです。彼はアメリカに移住して、ハーヴァード大学教授になり、経営史学会をつくつた。ビジネスマンがキャピタリストと区別されたのです。

こうして、欧米においては二〇世紀になつて経営の大切さに気づかれたのですが、日本では最初から経営が自立していました。日本資本主義の成立は、労働者と資本家がつ成したのかという観点から研究されてきました。明治日本の労働者は半分まだ農民である。農業をしながら半分副業的に賃労働をしているとか、製糸女工のように家計補助的で労働者として自立していかないとか、明治日本は完全な近代資本主義社会でないと言われました。

しかし、経営が自立しているかどうかという観点から見ますと、日本は近世江戸社会に、支配者階級は士農工商の武士ですけれども、武士は土地を所有していません。日本社会において明治の地租改正でだれがどの土地を持つてゐるかを確定しました。一部の大名を除いて武士は土地を持つていない。俸禄で生きていた。金禄公債をもらつてそれを銀行に預けて利子で生きるか、現金にかえて何かするといふ選択しかないことに気づかされる。要するに、武士は土地を持つていなかった。

では、彼らは何を持つていたのか。経世済民の能力です。経世済民は儒学からきた観念です。天下泰平をまつとつうするには、国を治めなければならぬ。国を治めるに

は、家をととのえねばならない。家をととのえるには身を修めねばならない。身を修めるには、心が正しくて意が誠でないといけない。心が正しく意が誠になるには知を致せ。知を致すには物に格(いた)れ。あるいは物を格(ただ)せ。格物致知、誠意正心、修身齊家、治國平天下。勉強すれば、身が修まり、家も国も治まって天下は泰平になるという教えです。根本は勉強せよというのですから、これは力による統治とは違います。経世済民の統治の過程で経営の資質が蓄積された。目に見えない経営能力が蓄積されていった過程が見えてまいります。

明治時代に企業を起こした代表的企業人には武士出身者がいます。たとえば、関西では五代友厚が大阪財界の基礎をつくった。関東では渋沢栄一です。五代は薩摩の儒家の次男坊ですから、相続すべきものがありません。にもかかわらず、なぜ経営者になれたか。企業を起こし得たのか。文字どおり、彼は起業の才があったからだと言わざるをえません。そして、渋沢の場合は幕末には浪人です。官に一回雇われますが、このままでは日本の経済が具合が悪いというので、官を辞して、あとは五〇〇幾つもの企業を起こすわけです。

彼らの例に典型的なように、資金を持っているとか土地を持つていること、つまり資本家であることが日本の経済発展をもたらしたのではない。経済発展の根幹にあるのは経営です。ヨーロッパでは資本家が自立したのに対して、日本では経営者が自立しました。両者は並ぶものです。イギリスの場合には、資本家と生産手段を持たない生産者とが分離したとすれば、日本の場合には、生産手段を持つている生産者(農民)と持たない経営者が分離した。

どちらが今日の観点から見ると重要か。私は日本の発展の型の方が重要だと思えます。これまでヨーロッパ的、マルクスの観念によって、社会をどうつくっていくかということに、まず労働者をつくらねばならないということから、ロシア革命の場合、まだ農民ばかりで労働者がいないから、労働者階級をつくって、貧しい労働者が連帯して革命しなくてはいけないという議論。一方、農民が共同体をつくっているから、そのまま社会主義革命の母体になるという議論。この二つに分かれたのは、労働者と資本家という区別が前提にあるからです。労働者が集まって社会主義社会をつくるという理屈なので、まずそれをつくらなくてはという議論でした。

日本におけるかつての講座派と労農派の資本主義論争も革命戦略の違いから出たものであって、労働者階級がいると考えた社会党の母体となった労農派と、まだできていないので労働者階級をつくるための近代資本主義社会をつくらなくてはいけないという二段階革命を唱えた共産党の母体の講座派の対立も、同じ図式にのっとって、戦術が違った。マルクスやマルクス主義者のいう primitive accumulation この primitive は原始的という意味ですが、文字どおり、その議論そのものがプリミティブ、すなわち幼稚であつたと思います。原始的蓄積論はプリミティブ（幼稚な）理論であり、今世紀をもって退場していただく。

本当に大事なものは何か。経営する才ですが、その蓄積をどういえばいいか。primary accumulation がよいと思います。primary とは、プライマリー・スクールは小学校のことですね。最初の学ぶところ、「第一の」という意味もあります。「本来の」という意味もあります。資本主義的な経営に先立って、本当に大事なものは人間の資質を磨くことです。イギリスで primitive accumulation が進行したとすれば、日本では同じ時期に primary accumulation が進んだのです。

ちなみに、ピーター・ドラッカーという学者は日本人に人気があります。彼は本の中で日本を誉めるわけです。なぜかという、模範が日本の中にあるからです。日本は経営者が所有者になっていくといやがられるのです。我が、早稲田大学の先輩で長野オリンピックの黒幕をやつた人がいらつしやいますけれども、あの人は経営者であると同時に大金持ちですから、うさん臭く見られる。ご親戚の方がおられると申し訳ありません。（笑）

しかし、一方、土光敏夫さんのようにメザシを食べ、非常に質素であると、「さすが」となるわけです。経営と所有とが本来分離していたところに、所有がだんだんくっついてきているのが日本です。十分にくっつかないので、日本の社長さんはアメリカの社長とくらべると質素です。

アメリカでは所有から経営がだんだん分離してきましたが、まだ所有のほうが大きい。英米では所有者が経営もした。所有の中に経営が埋めこまれていた。大事なものは経営をしていたということです。その違いを踏まえれば、本源的蓄積論はナンセンスです。本来的蓄積こそが根本です。

それからもう一つ、本来的蓄積を可能にした原因について

てもうしあげたい。海洋アジアから海洋中国をとおして中国文化が入ってきたともうしあげました。茶碗、砂糖、木綿、生糸・絹織物とか、こういう中国起源の物産が戦国期から近世期にかけて、とうとうと日本の中に流入しました。最初は買っていたのがやがて全部自給するのですが、海上の道を舶来したのは単にモノだけではありません。文物が入ってくる。一番大事なのは文すなわち書籍です。農書も含めてです。本草といわれた医学・医薬書、経世のための書籍が入ってきます。それはヨーロッパにおいてイスラムの文献がラテン語に訳されてヨーロッパ人の知的資産になっていくのとパレルルになっていますが、世界観も舶来したのです。

近代ヨーロッパの世界観は国際法です。日本は幕末・明治期にそれを万国公法と呼びました。この原型は一六二五年に国際法の父といわれますオランダの学者グロティウスが、『戦争と平和の法』という本を書いた。この書物は戦争には正しい戦争がある。国王が防衛のためにする戦争は正しい。しかし、私的に領地を奪うような勝手はよくない。戦争には正しい戦争があるという彼の考えを各国が受け入れた。その受け入れたきっかけは、三十年戦争の帰結

である一六四八年のウェストファリア条約です。新教と旧教のキリスト教同士が争って、各国別にウェストファリア条約を結びます。そのときに国王は国家を防衛する権利、つまり交戦権がある。戦争の権利を共有して主権国家ができ上がったのです。

世界を「戦争と平和」という観点で見る世界観はどこから来たかという点、イスラムの世界観でしょう。イスラム世界ではダル・アル・イスラーム（平和の家）とダル・アル・ハルブ（戦争の家）に世界は分かれる。異教徒とは戦争をしてもいい。戦争の家と平和の家として世界を見る。こういうイスラムの世界観がヨーロッパに換骨奪胎されて入っていることに気づかされます。

ちなみに、治外法権を不平等条約としてヨーロッパが発明したように言われますけれども、これも違います。これもベニスの外交官がイスタンブールに行つて、彼らはキリスト者ですから、トルコの人たちが「お前たちにイスラム法を適用できない。だからお前たちはお前たちでやれ」。これはキャピチュレーションと言ったのですが、異教徒の問題の処理を異教徒にやらせた。それがやがてだんだんと自分たちの権利だ、自分たちのやり方こそが普遍性がある

というふうには、相手に治外法権を要求していくように変質した。もともとはイスラムの世界からもらったものです。

ヨーロッパの近代の源流を見ていきますと、ルネッサンスに溯るのですが、イスラム世界から影響を受けて、それから自立してきたのが近代ヨーロッパ社会であることがよく見えてきます。

一方、中国の世界観は華夷秩序です。華は文明、夷は野蛮ですから、戦争と平和ではなく、文明と野蛮という観点から世界を見る。文明とは徳をもつ天子が国を治めるといふ、朱子学的な天下観によつていますので徳治主義になる。それは人治主義です。人が治める法ではない。その分だけ恣意が入りますが、徳を君子が体現している限りにおいて、いい治世になる。名君とは学徳のある方です。こういう中国の徳治主義の思想が、日本では換骨奪胎されて、徳のない無能な主君は「押し込め」を喰らい、徳治の美をあげるために人材が登用されて、経営の資質がはぐくまれました。

さて、二つの脱亜の文明が、一九世紀中葉に出会いました。一方のヨーロッパはフロンティア開拓、資源浪費、覇権主義、富国強兵です。他方の日本はリサイクル、いわば

「まわし」の形をもつ、庭園国家、富国徳であった。こういう二つの新しい文明の出会いであった。日本は日本型を捨て、ヨーロッパ型に入つて、そのツケを敗戦で払い、アジア侵略で迷惑を及ぼし、戦後は富国化に力点をおいて、経済大国をつくつたのですが、私は二〇世紀末になつて、ヨーロッパ型は破綻したと思います。

ポール・ケネディの『大国の興亡』という本がございませう。著者はアメリカで先生をされている。彼の先生はマイケル・ハワードという戦争史の権威です。マイケル・ハワードはイギリスのオックスフォード大学の勅任教授の最高位のプロフェッサーでしたが、その弟子で、大国は軍事力を持っている。軍事力を保持するには経済力がある。したがって、エコノミック・パワーとミリタリー・パワーを二つながら持っているものが大国になると論じた。言いかえますと、軍事力は強くても、経済力が駄目になると大国でなくなる。その興亡が一六世紀から五〇〇年間の大国の興亡をもたらした。やがてアメリカも経済力が駄目になる可能性がある。大国でいられなくなると論じた。

日本人は明治時代に富国強兵を国是とした。世界の主要国全体も富国強兵で来ましたけれども、二〇世紀末になつ

てソビエトとアメリカという超大国が軍事力構築に金をかけ過ぎて、ソビエトが破産して自壊した。アメリカは世界最大の債務国に転落しました。軍事負担はできないというのが結果です。そのほか、たとえばイラクの場合、軍事立国化をめざしたと見ることができましょう。それが結局、湾岸戦争で国際社会からつまはじきにされる。北朝鮮も軍事立国ですが、民衆が飢えている。富国強兵路線は破産するということです。

冒頭で申しましたごとく、世界単位がだんだん小さくなります。侵略はますますできにくい。軍事立国化は、しばらく続くにしても、将来性がないという段階に入っている。

そのことは軍事力が要らないということではありません。警察力は要ります。国際紛争を解決する手段として軍事力は警察力として再編されていくでしょう。国際的には一国が軍事力ないし警察力を独占するのではなくて、複数の国、たとえば国連が中心になって共同して国際紛争の処理にあたる警察力にかわっていくでしょう。いまはその過渡期です。また、超巨大な核装置が存在しているロシアが経済的に破産すると、核管理という大変な危険を国際社会

に及ぼします。そこには経済的負担や軍事的緊張が予想されるので、軍事力はまだ必要ですが、富国強兵という立国の形は終わったということです。

最後に、経済発展は何のためかという問題に戻ります。文化の成熟のためであると思います。それは歴史的にもそうでした。小国が自立する基礎も文化です。世界単位がますます分化し、異なる文化共同体が自立していくのが趨勢です。

戦後の日本は経済発展を目的にして、何のための経済発展かを問わなかった。経済発展は、日本のアイデンティティを確立し、暮らしをよくするためにある。暮らしは世界で地域ごと、民族ごとに違う。その違いが個性でありアイデンティティである。世界が文化を基礎に小さい単位に分化していく一方で、文化交流がものすごい規模で起こっています。人口六〇億のうち、たとえば、一九九七年だけで六億の人が世界を移動しています。それが生む経済量は世界のGDPの一割に達しています。ものすごい規模です。ネットワーク化が時代の趨勢で、地球が小さくなっています。

文化の交流が時代の趨勢ならば、憧れられる文化すなわ

ち文明になるのが得策です。憧れられるような国の形をつくり上げた方がいい。憧れる国から憧れられる国になった方がいいと思います。

日本は、はっきり言って憧れられていない。国際観光協会の統計では、日本にお越しになる人の数は四〇〇万人を超えない。上から三〇位以下です。フランスやアメリカやイギリスや、香港やシンガポールと比べても日本は低い。観光貧国、見られるに値しない国になっています。これは寂しい。一体どこが悪いのか。そもそも経済発展が文化の成熟のためにあるということすら考えられてこなかった。

これからは、まず、文化を暮らしの立て方と考えるべきです。大阪、東京、名古屋が特にそうですけれども、皆が都市の中の「箱」に住むようになった。土から離れている。文化の原義は土を耕すことです。自然に対して作為を加えるところに文明行為があった。土から離れているのは根本的な問題です。

土をいじれないのかというと、過疎地帯がたくさんある。中山間地とか過疎地とか多自然地域に、私は日本人の生活のフロンティアがあると思います。

そういう多自然地域に人間が移り住んでいくようにす

る。これまで日本はヨーロッパにならって、原料を輸入して製品を輸出するという加工貿易ができましたので臨海工業地帯に人々は集って住んでいます。しかし、その時代は終わりました。日本は製品輸入率が一九九〇年に五割を超え、今は六割を超えています。間もなく七割になるでしょう。日本は製品を輸入してモノを使うことに能力を使うべき時代にきています。モノはアジアから買っているのですが、買っても置く場所がない。狭い箱の中に生きているからです。また使ったゴミを処理する場所がない。土に返せない時代になっている。

交通・社会資本を整備して山中あるいは山間地域に住めるようにし、たとえば今のような容積率を二〇〇%とか一〇〇%とかではなく、建ぺい率を二割に抑え、庭を確保する。高さも制限する。都会では庭はヨーロッパから来た公園の思想によってイメージされている。公園の思想は、明治以前にはありません。公園の思想はヨーロッパから来たものです。

日本人は庭を失いました。公園の花は摘めば泥棒になります。花泥棒は許されるかもしれませんが、花をつくれなような生活空間の中に日本人の三分の一が住んでいる。

一四〇〇万戸という「箱（集合住宅）」の中に四八〇〇万人近い人たちが住んでいます。そういう住み方を徐々にかえていくことがこれからの課題でしょう。

北は北海道から南は沖縄にまで、違う風土、生態系、自然を生活の中に生かした場合、北海道は亜寒帯、九州沖縄は亜熱帯に近い。本州は温帯である。同じ緯度でも高低差があるので生態的には豊かです。その多様性を庭の中に生かします。日本を地球の生態系のミニアチュアないし箱庭としてイメージできます。あるいは、日本列島を地球の多島海のミニアチュアと見立てることが出来ます。北海道をアメリカに、本州をユーラシア大陸に、四国は何となく海洋としていますからオーストラリア、九州は火山があつて火の国だからアフリカに見立てる。怒られるかもしれませんが、いづれにしてもかく見立ての文化が日本にあります。日本を地球に見立て、地球の多様な生態系に応じた個性ある暮らしを生活実践としてつくり上げていく。それは多島海の地球をつくり上げていくモデルになるでしょう。

日本人は一見、単一民族のようですが、アイヌや在日韓国人もいるということ以上に、島それぞれがそれぞれ固有の生活を持っている。日本には六八五二の島があります。

有人島はそれより少ないのですが、島には異なる文化があり、それが暮らしの立て方として多様に開花しますと、ガーデンのある生活景観が島々に広がるので、*garden islands*と呼ばれる日がくるでしょう。それは美しい日本のイメージであり、美しい地球のイメージを形にするものです。

日本という国は、脱亜して自立したとき、美の文明として世界史に登場しました。文化的価値の真・善・美の中で、日本人は真とか善よりも、美にたけている。日本は美しいというイメージがまだ持たれています。しだいに幻滅する人も多くなっています。もともと美しい国というイメージがあるので、これを経済力や技術力を通して生かしていくことが、未来への課題ではないでしょうか。

それが実現できますと、将来像を対外的にも描くこともできる。日本が影響を受けた海洋アジア、すなわち現在のNIES、ASEANは海に面している地域です。海洋アジアは西太平洋の一部であり、それはフィリピン諸島、スンドラ列島、さらにその南のスルー海からオセアニアにまで広がっている。西太平洋には世界最多の島が広がっています。日本は海洋アジアからモノを、海から洗われている

いろなものを国内に工夫して生かしてきた。この生かした形がきれいであれば、かつて恩恵をうけた海洋アジアに美しい文化の影響をあたえるでしょう。現在の日本は海洋アジアと経済的にかかわりを深めています。それは縦軸ないし経度のつながりが深まっているということです。

経度のつながりは世界の潮流です。北アメリカはNAFTAで自由貿易連合をつくり、またアメリカ合衆国は南アメリカのブラジルやベネズエラやアルゼンチンにもすくく投資をしている。北アメリカと南アメリカには密接な経済的、歴史的な紐帯がある。またヨーロッパはスカンジナビアから地中海まで南北一体のEUをつくり、その南にあるアフリカはかつてヨーロッパ人が植民地にしたので、ヨーロッパとアフリカとは運命共同体と見られます。少なくともヨーロッパはアフリカに対して責任をもっています。ヨーロッパではアフリカのニュースが多い。

そういうように、経度のつながりが深まっていることに照らすと、日本にとっては半月状に広がった西太平洋の島々が重要です。そこは生活様式も宗教も民族も言語も食物も違う多様な世界で、文化的に豊饒です。豊饒の海 sea of fertility です。三日月状ないし半月状をなしています

ので、fertile crescent of the sea と呼ぶこともできるでしょう。

fertile crescent とは古代の文明における文明の発祥の地が fertile crescent、いわゆる肥沃の三日月地帯でした。ヨーロッパ人にとってそこが最初の文明の発祥の地です。それがエジプトを経て、ギリシャ・ローマ、ピレネー、アルプスを越えて西ヨーロッパ、さらにアメリカに広まった。

しかし、陸地中心な世界観ではなく、二一世紀にふさわしい地球的観点から立つならば、多島海の広がっている豊饒の海にこそ未来があるでしょう。

ちなみに fertile crescent of the sea とは、月にアメリカ人が行ったときに、荒涼たる月面のある地域を fertile crescent of the sea と名づけたのです。しかし、地球には文字通りの「豊饒の海の半月弧」があります。日本はその要に位置しています。モデル提示の意味で、日本の足元から garden islands をつくり上げる。子どもたちには教育効果もある。リサイクルないし「まわしの文化」を再興できる。敷地が大きくなる条件が過疎地帯にあります。居住空間が広がれば個人消費が増えます。物をアジア

諸国から買っていますので、日本の内需が増えれば、膨大な黒字に対する責任の一端を果たして近隣アジア諸国にも喜ばれる。消費が増えますと、投資が増える。投資が増えると税収が増えます。そういう意味で *fertile crescent* は経済効果もある。きれいだ、人々が見に来ます。観光効果が出ます。人々が見に来ることによって、それがもし憧れをさそえば、真似られるでしょう。日本は憧れられる文明国の形をもてると思います。

これから文化競争の時代です。文化は相手に強制するものではありません。暴力と威嚇ではなく、魅力と感動が文化の勝負どころです。人々が憧れてくれるような、そういう美しい島国ガーデンアイランズです。最後は、舌足らずで一方的な主張という感じになり、研究会の趣旨から逸れたかもしれません、私にとつて一番大事と信ずるところに触れました。ご清聴、どうもありがとうございます。(拍手)

(かわかつ へいた・国際日本文化研究センター教授)

〔編集委員会注記〕 本稿は一九九八年一〇月三日、大阪経済大学で行われた第一四回経済史研究会の講演内容である。